

# 大阪初の洋式ホテルの起源とその推移

## ——自由亭ホテルの供給目的と存在意義の研究——

### 廣 間 準 一

#### 1. 背 景

日本の洋式ホテルは、外国人居留地にその起源を持ち発展した歴史をもつ。この開国、開港による外国人居留地の設置は、外国人の流入を背景として外国人を対象とした洋式ホテルの端緒となった。明治時代が、国内のホテルにとっての揺籃期から草創期にあたる。この期間におけるホテルに関する文献は、東京地区を中心とするものが数多く存在するものの、大阪のホテルに関する文献は数少ない状況である。さらにその文献内容は、歴史考証的研究が中心となっており、その時代にホテルが果たした役割についての研究までは至っていない。このためホテルが供給された目的とその存在意義についての研究が必要とされる。

#### 2. 研究目的

本稿は、大阪の洋式ホテルの起源となったとされる自由亭ホテルを取り上げる。このホテルは民間人の親子二代にわたり大きな役割を果たした。大阪初の洋式ホテルは、一般民間人の手により経営と運営がなされた特徴を持ち、その後売却に至る経緯をたどる。既存研究では、親子二代の民間人によりホテルを供給された目的と存在意義、さらにその後ホテルの経営から手を引き、ホテル売却に至る要因についての検証がなされていない。

この未検証部分の解明は、自由亭ホテルの役割と位置づけをより明確化することとなることから研究目的とする。

#### 3. 研究方法

自由亭ホテルが大阪における初の洋式ホテルとする根拠は、戦後に運輸省が編集し出版された『日本ホテル略史』で、大阪地区における洋式ホテルの開発から運営にいたる経緯が記載されており、同ホテルが最初に登場することによる。

また同時代に関する文献は、川口居留地を中心としたものが主流となっており、その関連事項としてホテルが取り扱われている。このため写真1、2に示す自由亭ホテルが、供給され運営された目的については同時代の背景関連史料から、さらに自由亭ホテルの開業、運営に参画し、貢献した草野丈吉とその娘（長女）お錦という二名の民間人について記述された史料をあわせ導入する。これによりホテルの供給目的と存在意義、並びにホテル売却に至るまでの経緯を検証する方法とする。



写真1 西洋料理業 自由亭写真  
(出典/商工技芸. 浪華の魁)



写真2 中之島の「自由亭ホテル」  
(出典/<http://www.oml.city.osaka.lg.jp/index.>)

#### 4. 自由亭ホテルについて

##### 4.1 自由亭ホテル開業までの経緯

堀田暁生（1988年）<sup>①</sup>は、草野丈吉の職歴について長崎出島でボーイに始まり、洗濯役、見習いコックから専属コックへ、そして自己資本で西洋料理店を開業したこと、そしてこの時期に薩摩藩の五代才助（友厚）との接触等の経歴を『暁霞生彩』を参考に著述している。

この五代才助（友厚）は川口居留地の設置時、同居留地の判事（外務官判事）であり、草野丈吉の西洋文化と交流経験からその手腕を高く評価していたことから川口居留地内に設置された止宿所の司長に任命する。

この止宿所は、海外からの外国人の宿泊場所ではあるものの、外国人の行動監視を目的としており、その運営管理は信頼に価する人物の登用が必要とされたものと考えられる。このため五代才助（友厚）は、長崎時代から親交があり外国文化に精通していたことを総合的に判断した結果、草野丈吉をその任にあたらせたものと考えられる。

さらに五代才助（友厚）が草野丈吉への信頼を示すものとして、明治2年5月に外務局から草野丈吉へ破格の条件で止宿所運営の建設費、什器・備品等購入費貸付金額を貸与している

ことが、次の資料から明らかである。

「七、外国人止宿所 九月二十五日居留地ニ外国人止宿所ヲ設ケ長崎ノ人草野屋丈吉ヲ司長トシ宿泊外人ノ為メニ諸般ノ便宜ヲ興ヘシム今ノ大坂俱樂部ホテルノ濫觴ナリトウ」<sup>(2)</sup>

「去辰年御当地御開港以来、追々外国人罷越候に付、為御取締止宿所御用、私に被仰付冥加至極、有難仕合奉存候。右に付而者止宿所在地所買入並建物入用部屋入附道具等に至る迄一時莫大な入費相嵩、身薄の私儀、何分金調行届兼候場合より、無抛拝金之儀奉願上候処、出格の思召を以て御聞濟被成下、則昨辰九月より拝金メ高並当已十二月迄加利足元利共書面之通槪に拝借仕候処実正也。」<sup>(3)</sup>

しかし、草野丈吉は、その勤務からわずか1年後には止宿所をやめ、当時の川口与力町で、フランス人が経営していた下宿屋式チャブ屋を買収し独立する。

このチャブ屋を改修し、「欧風亭ホテル」と名づけ明治3年末に開業し、ホテル兼西洋料理屋という形態をとった。そしてこのホテルでの成功により、明治4年に梅本町に新店舗を作り移転しており、ここで初めて「自由亭」という屋号を付けている。この時点が大阪における洋式ホテルの起点となったと考えられる。

草野丈吉が、この時点で洋式ホテルへ舵を切った要因の検証として、居留地内も開港から時間が経ち、外国からの商人の訪日数も増加傾向を示しつつあったものと考えられる<sup>(4)</sup>。

この明治3年から4年の川口居留地は、川口電信局の開設、馬車鉄道の完成、居留地関門の廃止、川口波止場をつくっていることから大きく環境が整備されつつあった。

大阪においてもこの時期は、海外からの賓客をもてなす施設と料理の供出が必要となっていた。このため草野丈吉が単独で洋式ホテル開業を目指したものと考えるのは難しい。その理由は、ホテルの営業実績を調査した結果、自由亭ホテルが担当した宴会は、明治5年2月5日にロシア皇太子が大阪を訪れ西本願寺に宿泊、この夕刻にロシア皇太子は大阪府の知参事を招いての饗応時の料理は「松島自由亭ノ割烹」（大阪新聞）とある。さらに明治10年2月5日、京阪神間鉄道開業式に明治天皇の神戸での昼食は自由亭が調理を担当している。またその日の夕刻に大阪府庁で行われ、自由亭が調理・供出している。この外、明治10年2月明治天皇の造幣局行幸時の晩餐会等の実績などがある。

この自由亭ホテルのこの営業内容は、明らかに官の後ろ盾を裏付けるものであり、当時の大阪の迎賓館的存在であり半官半民的色彩の強いホテルであったことを示すものである。

また、この自由亭ホテルの主要な役割が料理の調理とその供出であったことを示すものでもある。

#### 4.2 営業拠点の変更とその要因

自由亭ホテルは、明治14年（1881年）に中之島に自由亭の支店（現在の東洋陶磁博物館の地）を新築開業している。そして明治17年（1884年）には、この支店の東隣に位置する温泉場と精華楼を購入している。この営業拠点変更の根拠は、川口居留地の運営と大きく関連している。

明治19年（1886年）から居留地閉鎖に伴い居留地の競売が開始され、明治32年（1899

年)に居留地が廃止されている。

川口居留地は、慶応4年(1868年)に大阪開港場となり居留地の競売が始まって以来18年が経ち、一定の役目が終了し閉鎖となった。このため自由亭ホテルの商売の存在意義がなくなることから中之島への支店開業と同時に、本店の本格的移転を模索していたものと考えられる。

#### 4.3 中之島での経営とホテル売却経緯の検証

草野丈吉は、明治19年(1886年)から居留地閉鎖の年に没している。その後の自由亭ホテルの経営は、草野丈吉の長女・錦が受け継ぐこととなる。草野錦は、明治28年(1895年)に買収していた先心館(元の精華楼)を改装し「大阪ホテル東店」を開業し、翌年「大阪ホテル」(西店)を開業させている。しかし、その3年後に同ホテルを大阪倶楽部に売却し、川口居留地から始まった事業を終えている。つまり、中之島におけるホテル経営は、実質的に草野丈吉の長女・錦がおこなっている。

木村吾郎(1996年)<sup>(5)</sup>は、草野の親族がホテルを売却した経緯については不明としている。しかし吉弘白眼(1906年)は、お錦についての人物像やその性格について克明にホテル売却時の心境と考え方を記述している。先ずお錦の性格については、次の通りである。

「一寸容貌を見ても、至極神経質な、細心な、小さい事に気が付きさうな女である、併し其目の甚だしきまでに活動して、一毫の油断が見えぬのは、才氣餘りあつて、多少猜疑心もあるかとも思われる、が才氣のあるものにはそれは免れぬところで、殊に女性である以上は致し方もない、兎も角容貌からして利口な女あると断定は容易に下すことが出来るのである。」<sup>(6)</sup>

そして、お錦は、そのホテルの売却にあたり、次のような考え方の下で売却したことを記述している。

「お錦は大阪ホテルを持って居た時に、十一萬圓で菊池病院へ買つて呉れとの交渉を受けたのだが、中の島のやうな所へ病院を置くよりも矢張ホテルを置いたが可からうと云つて、それで九萬圓で今の會社へ譲り渡した。お錦は男優りではあるまいか。」<sup>(7)</sup>

「お錦が老先きの楽しみは、今の財産から幾分かを割いて東京に出で人材育成をする事である、多くの貧書生に學費を給興する事である、これも多くの人が云ふところだが、併しお錦だから之れを實行するのであらう」<sup>(8)</sup>

「女としてあの位の財産を有し、あの位の良い婿を貰ったのだから、最早や金を儲ける必要はないのである、思ふにお錦は必ず多少安心して居るに違ひない、サア此處が即ち人間の賢愚の分水嶺で、人生の最大難關である」<sup>(9)</sup>

以上が、お錦がホテルの売却とその後の人生について考えていたことである。草野丈吉は、このお錦と有子という二人の娘をもうけたものの、男子がおらず、自由亭ホテルの経営は、こ

のお錦に一手に引き継がれることとなった。このホテル売却の要因となったのは、ホテルの売却の前年（1898年）に、お錦を全面的に助けていた自由亭ホテルの総代理人の星丘安信が亡くなっている。このことは、ホテルの経営と運営の支えを担っていた人物をなくし、お錦がホテルの運営と経営を一手に背負うことになり、女性にとってかなりの重責に外ならない。加えて、長年の蓄財もあり女性としての家庭的な日々を求め、人材の育成に私財を投入する決意にいたったものと考えられる。

自由亭ホテルは、開業と運営は、開港とともに国策の第一歩としてなされたものの、あくまでも企業としての形態となっておらず民間の一個人商店としてのものであったと考えられる。このため時代の変化の中での売却という経緯をたどったものと考えられ、大阪のホテルが企業としての形を整えるのは、次に登場する大阪ホテルの時代を待たねばならなかったと考えられる。

## 5. ま と め

大阪初の洋式ホテルに関する既存研究では、同ホテルの供給目的とその時代における存在意義、さらに同ホテルの売却に至る経緯とその要因について未検証部分となっていた。

この未検証部分については、居留地の開港から明治時代の一時期における大阪初の洋式ホテルの果たした役割とその運営内容の検証により解明することとした。

自由亭ホテルは、一般市民が中心となり止宿所から大阪初の洋式ホテルの誕生に寄与したのが大きな特徴となるものの、外務局は、草野丈吉への破格の貸与条件や海外からの賓客や天皇への料理供出といった機会を提供した。この関連史料での事実関係は、明らかに国策的な意図と目的があり、その後ろ盾として官が大きく関与していたことを検証した。

さらに自由亭ホテルが親子二代で経営され、最終的にホテル売却となった。この時期のホテルは、確たる会社組織としての基盤が存在せず、一個人商店的経営であり経営体質は弱小であったことを示すものである。

## 註

- (1) 川口居留地研究会著『大阪近代の歴史を考える「川口居留地」』川口居留地研究会、1988年、p 23-24
- (2) 大阪税関『大阪税関沿革史第一期 横浜税関』大阪税関、1905年、p 127
- (3) 川口居留地研究会『大阪近代の歴史を考える「川口居留地」』川口居留地研究会、1988年、p 23
- (4) 川口居留地研究会著『大阪近代の歴史を考える「川口居留地」』1988年、p 16-18
- (5) 木村吾郎『大阪のホテル今昔－自由亭ホテルから新大阪ホテルまで－』1996年、大阪春秋／大阪春秋社、p 11
- (6) 青眼白眼『インターネット公開資料 図書』1906年、吉岡宝文館、P 108-109
- (7) 同上
- (8) 同上
- (9) 同上

## 参考文献

- 富田昭次『ホテルと日本近代』2003年、青弓社  
 長谷川堯『日本ホテル館物語』1994年、プレジデント社